

# 社説

## その名に値するの



### 原子力大綱

国の原子力政策の基本方針となる大綱が閣議決定された。使用済みの核燃料からプルトニウムを取り出して再利用しようという「核燃料サイクル路線」を堅持するのが柱だ。本当に実現できるのか、疑問を残しながらの決定である。

国は原子力の研究や利用について一九五六年以来、約五年ごとに長期計画を定めてきた。今回の「原子力政策大綱」は十代目にあたる。国の役割が低下したことを受け、名称を計画から大綱に改めた。これから十年間の施策に反映させる。

大綱は原子力発電を引き続きエネルギーの柱に位置付けた。今は総発電量の30〜40%程度を占めている。二〇三〇年以降もこの水準を保つが、それ以上を目指すのが適切だとした。安定供給や地球温暖化防止の観点からである。

問題は、原子力発電によって出る使用済み核燃料の扱いだ。大綱をつくるに当たり、再利用する核燃料サイクル路線を続けるかどうかが焦点になっていた。堅持することにしたのは、直接処分する場合にかかる費用を極力抑えた結果である。

路線を変えたと例えれば、再利用を前提に関連施設を受け入れてきた青森県などの信頼関係に響く。積極的な選択といえる。続けるを得ない意図が強い。その意味で、原子力政策の行き詰まりも浮かび上がる。先行きはいぜん不明だ。

まず、核燃料サイクルの要となる高速増殖炉の実用化について疑問がぬえない。大綱は二〇五〇年ごろからの導入をたづな。しかし、研究

## 新たな治療に道開く



### 心臓血管再生

開腹手術の「もんじゅ」は事故で長く止まったままである。跡く計画もなく、実現の道筋は見えない。

当面は、使用済み核燃料から取り出したプルトニウムを原発で燃やす考えた。「フルサーマル」と呼ばれる。こちらも課題を抱える。発電後にまた、使用済み核燃料が出る。これをどう処理、処分するかの判断は先送りしている。

大綱は一方で将来、状況が変わることも想定し、使用済み燃料を直接処分する技術の調査研究をしていくことも打ち出した。原発の運転に伴い、年々たまっていくプルトニウムをどうするか、結局、明快には示せていない。

国の基本方針を定ずる「政策大綱」として十分な内容を言えない、多大な費用と時間がかかるだけに確かな着実が必要だ。国は原子力政策の進め方について、広く国民の意見を聞き、より説得力ある将来展望を打ち出す責任がある。

まず患者本人から骨髄液を採取した。骨髄液には血管をつくる元になる幹細胞がある。分離装置を使って高純度に抽出し、これを問題の冠動脈周辺の心筋に注射で移植した。

その結果、移植した個所に毛細血管ができ血流が戻った。副作用も見られず、患者は退院している。同様に移植は国内では奈良大学病院に続いて二施設目という。

再生医療の効果を過大に見積もるのは避けるべきだとしても、重症の心疾患の治療に新しい道を開いた意味は大きい。安定した治療法として確立すれば、バイパス手術と比べ患者への負担が低くなる上、根本治療にもつながる。いっそうの進展を期待したい。

体内には神経や血液、血管、内臓の一部などもつくりに出す能力を持つ。たまたままた幹細胞(成体幹細胞)がある。自分の幹細胞を用い、病気の臓器の一部をよみがえらせることも理論の上では可能だ。信大医学部はそうした体性幹細胞を利用した再生医療の研究を重ねてきた。

信大はこれまでに手足の血管が詰まる疾患に対して、同様に血管を再生させている。動物実験で安全性を確認した上で、昨年二月、心臓病治療に应用するための大学医学部医師会承認の承認を得た。

先端医療には副作用など不明の点もある。一つ一つ手続を踏んだ上で、患者に対してもより丁寧な説明と同意が欠かせない。

再生医療の分野では中絶胎児の幹細胞や受精卵からつくる胚性幹細胞を利用する研究も進んでいる。倫理問題も絡むだけに、慎重な研究姿勢に加えて市民をきめた議論も必要だ。

開腹手術の「もんじゅ」は事故で長く止まったままである。跡く計画もなく、実現の道筋は見えない。

当面は、使用済み核燃料から取り出したプルトニウムを原発で燃やす考えた。「フルサーマル」と呼ばれる。こちらも課題を抱える。発電後にまた、使用済み核燃料が出る。これをどう処理、処分するかの判断は先送りしている。

大綱は一方で将来、状況が変わることも想定し、使用済み燃料を直接処分する技術の調査研究をしていくことも打ち出した。原発の運転に伴い、年々たまっていくプルトニウムをどうするか、結局、明快には示せていない。

開腹手術の「もんじゅ」は事故で長く止まったままである。跡く計画もなく、実現の道筋は見えない。

当面は、使用済み核燃料から取り出したプルトニウムを原発で燃やす考えた。「フルサーマル」と呼ばれる。こちらも課題を抱える。発電後にまた、使用済み核燃料が出る。これをどう処理、処分するかの判断は先送りしている。

大綱は一方で将来、状況が変わることも想定し、使用済み燃料を直接処分する技術の調査研究をしていくことも打ち出した。原発の運転に伴い、年々たまっていくプルトニウムをどうするか、結局、明快には示せていない。

開腹手術の「もんじゅ」は事故で長く止まったままである。跡く計画もなく、実現の道筋は見えない。

当面は、使用済み核燃料から取り出したプルトニウムを原発で燃やす考えた。「フルサーマル」と呼ばれる。こちらも課題を抱える。発電後にまた、使用済み核燃料が出る。これをどう処理、処分するかの判断は先送りしている。

大綱は一方で将来、状況が変わることも想定し、使用済み燃料を直接処分する技術の調査研究をしていくことも打ち出した。原発の運転に伴い、年々たまっていくプルトニウムをどうするか、結局、明快には示せていない。

開腹手術の「もんじゅ」は事故で長く止まったままである。跡く計画もなく、実現の道筋は見えない。

当面は、使用済み核燃料から取り出したプルトニウムを原発で燃やす考えた。「フルサーマル」と呼ばれる。こちらも課題を抱える。発電後にまた、使用済み核燃料が出る。これをどう処理、処分するかの判断は先送りしている。

大綱は一方で将来、状況が変わることも想定し、使用済み燃料を直接処分する技術の調査研究をしていくことも打ち出した。原発の運転に伴い、年々たまっていくプルトニウムをどうするか、結局、明快には示せていない。

開腹手術の「もんじゅ」は事故で長く止まったままである。跡く計画もなく、実現の道筋は見えない。

当面は、使用済み核燃料から取り出したプルトニウムを原発で燃やす考えた。「フルサーマル」と呼ばれる。こちらも課題を抱える。発電後にまた、使用済み核燃料が出る。これをどう処理、処分するかの判断は先送りしている。

大綱は一方で将来、状況が変わることも想定し、使用済み燃料を直接処分する技術の調査研究をしていくことも打ち出した。原発の運転に伴い、年々たまっていくプルトニウムをどうするか、結局、明快には示せていない。